

## 『更級日記』と夕顔の花

——夕顔憧憬の背景を探る——

元吉 進

### 一

『更級日記』には、作者菅原孝標女の少女時代の思い出として、『源氏物語』耽読のことが書かれている。父の任国上総国で『源氏物語』の存在を知った作者は、物語が手に入る都への帰還を薬師仏に祈った甲斐あってか、十三になる年に帰京し、「をばなる人」から「源氏の五十余巻」を贈られ、「(注一)」後の位も何にかはせむ」との思いで読書に明け暮れた、と記している。

そうした『源氏物語』の享受から作者が思い描いた自らの将来の夢は「光の源氏の夕顔ゆかがほ、宇治の大將の浮舟うきふねの女君をんなきみのやうにこそあらめ」とか、「物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を、年に一たびにても通はしたてまつりて、浮舟うきふねの女君をんなきみのやうに、山里にかくし据ゑられて」というものであったと述べている。こうした願望は、橋俊通との結婚によって出来た現実を目の当たりにして、夢からの覚醒、『源氏物語』的世界の否定とも思える述懐となってゆく。また、晩年、夫の死に接して生涯を振り返り、我が身の不幸の原因が物語耽読と信仰心の欠如にあると悔いてはいる。とはいえ、長谷詣での宇治の渡りで浮舟の物語に思いを馳せているように、夕顔や浮舟は終生、孝標女の心に影を落としているように思われる。

夕顔や浮舟が憧憬の対象として選り取られたことについて、「彼女が紫の上・明石の御方の栄耀えいようを願わず、家住みの身に期し得る夕顔・浮舟を自己の将来に思い描いているということである。(注二)」彼女の空想はおおげなく増幅せず、むしろつましく地道だったといえよう」と評される。日記中四回の言及がある浮舟は、継父常陸介に伴われて東国に下向し、そこで娘時代を過ごしたが、更級作者の父孝標も常陸介として下向している。また、作者は少女時代を上総介になった父と東国で過ごした。東国体験という共通項が浮舟憧憬の背景になっている。一方、夕顔は三位中將の娘であり本来であれば上の品に列せられるべき女性であったが、早くに親を亡くしており、後見の無い貴族女性の運命を象徴するかのような女性であった。更級作者は、夕顔と浮舟には、紫の上や明石君とは異なった、身の丈に近い親近感を抱いていたというわけである。

日記中、夕顔についての言及は一度しかないが、その意味は重そうである。夕顔の花の背景を探ると、夕顔という女性も浮舟同様、東国の記憶に連なる性質を持つと思われる。以下、作者が夕顔に憧憬を覚えたことの背景について、検討してみたい。

『源氏物語』の「夕顔」巻において、恋の通い路でのゆくりない邂逅から光源氏と夕顔との交渉が開始されるのであった。源氏の通い所、六条御息所は前東宮妃であり、誇り高く気の置ける愛人であったが、それと対照的な存在として夕顔は物語に登場してくる。一方で、源氏には正妻である葵が存在する。葵、夕顔と、その呼称は共に植物に関わっており、葵の上と夕顔は対をなす女性である。

ところで、葵と夕顔の対ということ言えば、相撲の節会が思い起こされる。奈良時代から平安時代にかけて、宮廷の行事として行われた相撲の節会に、相撲人の多くは諸国から貢進されて参加したが、その装束については概ね以下の様に説明されている。

相撲人は左右の近衛府に分属され、それぞれ左相撲（左方）、右相撲（右方）と呼称された。儀式の隊列での服装は、烏帽子、狩衣を着け、袴を着けずに犢鼻褌（種）に紐小刀を差し、素足であった。相撲召合（取組）では、着衣と剣をはずして犢鼻褌のみになり、左相撲は髪に葵の造花を、右相撲は瓠の造花を挿して登場した。この造花は綿で作られ、「挿頭花」または「挿頭」と称した。勝負が終わると、勝方は使用した挿頭花と剣衣を次に登場する相撲人に与えた。これらは「肖物」といい、勝者にあやかる意味があった。負方の次の相撲人は新しい挿頭花をつけて登場した。<sup>（注三）</sup>

例えば、『うつほ物語』は平安時代の文学作品としては珍しく、相撲の節会を相当な分量で描写している。とりわけ、「内侍のかみ」の巻は「初秋」、「相撲の節会」などの別名で呼ばれるように、七月初秋の頃おい、朱雀帝

を中心に左右の近衛府が節会準備に余念のない様子や、節会当日の有様などが描かれ、相撲の節会が巻のメインテーマの如き様相を呈している。当日の相撲人の装束については、

左、右近衛大将よりはじめて、よろづの天の下の人参りたまふ。左、右近の樂人、おりととのへて候ふ。面白きこと限りなし。みな相撲の装束し、瓠花かざしなど、いとめづらかなることどもしつ、左、右近の幄打ちつ候ふ。<sup>（注四）</sup>

と描写している。ここでは左方相撲人の葵の挿頭についての記述はないが、右方の挿頭である瓠花、つまり夕顔の花が描かれている。

また、平安時代後期の天永二年（一一一一）に成立し、最も整備された儀式書とされる有職故実書『江家次第』には、相撲の節会についても詳細な記載がある。「相撲召合」の項目で、「一番」の勝負について、割注で次のように記している。

左先出著葵華、取劍衣置北圓座、進立櫻樹下、次右出著瓠華、次々番、負方先進之、裏書云、葵瓠華、造花也、<sup>（注五）</sup>

この勝負の進め方は前掲の『相撲大事典』<sup>（注三）</sup>の記載に反映されているわけだが、「葵瓠華、造花也」とあるように葵と瓠の花は造花であった。葵は、一般には葵祭（賀茂祭）の葵が連想される。賀茂祭では社殿や牛車が葵と桂の葉で飾りたてられ、また挿頭にもされることから、諸鬘（もろかづら）といわれ、シンボルとなっている。賀茂祭の葵はウマノスズクサ科のフタバアオイ（双葉葵）で、賀茂葵とも呼ばれ、徳川家の紋章にも使われている草である。なお、『源氏物語』にもうひとつ、葵が出てくる。「藤袴」巻で、玉鬘には多くの懸想文が贈られるが、その内、玉鬘は螢兵部卿

宮にだけ「心もて光にむかふあふひだに朝おく霜をおのれやは消つ」と返歌を贈っている。ここで詠み込まれた「光にむかふあふひ」は日の光に向かつて咲く花であって、山中の小草として樹陰を好むフタバアオイではない。『枕草子』の「草は」の段にも「唐葵、日の影にしたがひて傾くこそ草木といふべくもあらぬ心なれ」と書かれる唐葵は、日の光の移るのに従って花が傾くことから、「藤袴」巻の葵はこの『枕草子』の唐葵同様、フタバアオイ（立葵）またはヒマワリ（向日葵）を指すと考えられている。また、相撲の節会で挿頭にされる葵と夕顔の関係については、次のような指摘がある。

『源氏物語』では光源氏の正妻は葵の上で、光源氏に見染められる一人に夕顔がいる。物語では両者が対立したようには一見思えないが、アオイとユウガオは陽と陰を象徴するのである。『源氏物語』より一〇〇年あまり下るが、平安時代末の朝廷儀式がまとめられた『江家次第』（一一一年）に、アオイとユウガオの対立を物語る行事が記録されている。それは七月七日の相撲の節会。左方の力士はアオイを挿頭し、右方の力士はユウガオの造花を挿頭した。アオイは葵と書かれ、本来はフタバアオイではなく、立葵のような昼咲きの陽の花である。それに対してユウガオは夜に咲く陰の花で、しかも果実は水の容器になり、水を象徴する。<sup>(注八)</sup>

右方相撲人の挿頭である瓠は「ひさご」、「ゆうがお」と訓じられる。「ひさご」はいわゆるヒョウタン（瓢箪）で、瓢箪はユウガオの実から作られる。ウリ科のつる性植物ユウガオの花は夕方開き、翌朝しぼむのでこの名があるわけだが、その実は球形のものから長円形のものまで、多様である。『枕草子』の「草の花は」段では、

夕顔は、花のかたちもあさがほに似て、言ひつづけたるに、いとをかしかりぬべき花の姿に、実のありさまこそいとくちをしけれ。など、さはた生ひ出でけむ。ぬかづきなどいふ物のやうにだにあれかし。されど、なほ夕顔と言ふ名ばかりはをかし。

と、大きくて不格好な実に言及し、せめて酸漿くらいの大きさであったらと残念がられている。

夕顔は相撲の節会の別の場面でも、重要な役目があったことが指摘されている。奈良時代から平安時代にかけて、相撲の節会が行われる二、三ヶ月前に諸国を廻って相撲人を招集した使者を部領使（ことりづかひ）とか相撲使（すまひのつかひ）などと呼び、左右の近衛府から派遣された。『万葉集』巻五には「相撲部領使」が見えている。『広辞苑』によれば、部領使は「夕顔の花をかざしにした」のであった。このように、夕顔は相撲の節会において重要な意味を持つ植物であった。

ところで、相撲の節会の起源として語られるのは、『日本書紀』の垂仁天皇七年秋七月七日の条に記す次の伝承であった。「当麻邑」の「当麻蹶速」は天下無双の力士と自認し、力比べの相手を探していると聞いた天皇は、相手のできる人物を諸卿に問うたところ、「出雲国に勇士有り。野見宿禰と曰ふ」とのことであった。早速、野見宿禰が召し出される。

是に野見宿禰、出雲より至りしかば、当麻蹶速と野見宿禰とに拵力せしむ。二人相對ひ立ち、各足を挙げ相蹶う。則ち当麻蹶速が脇骨を蹶え折り、亦其の腰を踏み折りて殺す。故、当麻蹶速が地を奪りて、悉に野見宿禰に賜ふ。是を以ちて、其の邑に腰折田有る縁なり。野見宿禰は乃ち留り任へまつ

(注九)  
る。

野見宿禰は当麻蹶速の腰骨を踏み砕いて殺してしまい、勝負がついた。野見宿禰はそのまま大和国に留まって朝廷に仕えることとなった。この野見宿禰は、『日本書紀』垂仁天皇三十二年七月条にも顔を出す。皇后日葉酢媛命の薨去に際して、殉死の風習に心を痛めていた天皇の意向を受けて、野見宿禰は出雲国から土部百人を呼び寄せて土で人や馬などの形を作り、殉死の代用とした。いわゆる埴輪の起源説話である。その功によって天皇は野見宿禰に「土部臣」を賜り、このことが土部(土師)氏が「天皇の喪葬を主る縁」となったとされる。

奈良時代の末、光仁天皇の天応元年(七八二)六月二十五日に土師宿禰古人、土師宿禰道長ら十五人が改姓を願ひ出ている。その内容は『続日本紀』に以下のように記載される。

土師の先は天穂日命より出づ。その十四世の孫は名を野見宿禰と曰ふ。昔者、纏向珠城宮に御宇しし垂仁天皇の世には、古風尚存りて葬礼に節無し。凶事有る毎に、例として多く殉埋しき。時に皇后薨して、梓宮庭に在り。帝、群臣を顧み問ひて曰ひしく、「後宮の葬礼、これを為さむこと奈何にせむ」とのたまひき。群臣対へて曰ししく、「一に倭彦王子の故事に遵ひたまへ」とまうす。時に臣らが遠祖野見宿禰進みて奏して曰ししく、「臣が愚意の如くは、殉埋の礼は殊に仁政に乖けり。国を益し人を利くる道に非ず」とまうしき。仍ち土部三百餘人を率ゐて、自ら領りて埴を取り、諸の物の象を造りて進りき。帝覽して甚だ悦びたまひて、以て殉人に代へたまひき。号びて埴輪と曰ふ。所謂立物は是なり。此れ即ち往帝の仁徳、先臣の遺愛にして、裕を後昆に垂れて、生民頼れり。式て祖業を觀るに、吉凶相半して、若し其れ諱辰には凶を掌り、

祭日には吉に預れり。此の如く供奉りて、允に通途に合へり。今は然らず、専ら凶儀に預る。祖業を尋ね念ふに、意茲に在らず。望み請はくは、居地の名に因り、土師を改めて菅原の姓とせむことを(注十)

請願の前半部分は垂仁紀三十二年に記された埴輪の起源説話と重なる内容である。願ひ出は、土師氏は天皇家の葬儀に預かるだけでなく、吉事にも奉仕してきたが、現状は凶儀を専らとしており、祖業を思えば本意ではないので、土師の名を改めて、居住地の地名に因んだ菅原に改姓させてほしい、ということである。この請願は光仁天皇の許可するところとなった。菅原氏の誕生である。菅原改姓の古人を祖として、菅原氏は清公、是善と続き、その子が道真であるから、古人は道真の曾祖父に当たり、また、道真から五世の末裔が孝標である。菅原は『万葉集』に「菅原の里」と見え、また「菅原や伏見の里」とも詠まれた、大和国添下郡菅原郷と考えられる。現在の奈良市菅原町で、式内菅原神社が鎮座し、菅原氏の本貫の地とされる。このように、菅原氏は相撲の節会起源伝承の当事者である野見宿禰の血統に連なる家系であった。

### 三

『続日本紀』記載の土師宿禰古人の改姓請願では、土師氏の祖、野見宿禰は「天穂日命より出づ」とされていた。天穂日命は『古事記』では天菩比命、『日本書紀』では天穂日命と表記される。記紀によれば、天孫降臨に先立って出雲に天下ったが、大国主神に媚びへつらって三年間復命しなかったとされる。「日」が太陽を表すとすれば、天穂日は「天上界の稲穂の霊的な力による神名」と考えられている。

ところで、天穂日命は、『更級日記』の上京の記に語られた竹芝伝承に登場する武蔵竹芝とも関わりがある。武蔵国「たけしぼといふ寺」に伝わった物語は、武蔵の男と結ばれた「みかどの御むすめ」がこの地に住み着き、宣旨によって武蔵国を預けられ、宮の生んだ子供たちは武蔵という姓を得た、という伝承であった。『続日本紀』によれば、称徳天皇神護景雲元年（七六七）十二月六日条に、武蔵国足立郡の丈部直不破磨らが武蔵宿禰の姓を賜わり、同八日に武蔵宿禰不破磨が武蔵国造に任じられている。また、『将門記』にも、平将門の武蔵国庁内紛介入に関する段で足立郡司判官代武蔵竹芝の名が見えている。「武蔵氏は武蔵国造くのみ 兄多毛比命（注十二）の後裔で豪族。始めは丈部氏を称し、神護景雲元年（七六七）十一月に武蔵宿禰（注十二）の姓を賜った」とされている。ここに名を挙げられた兄多毛比命は『先代旧事本紀』の「国造本紀」によれば、初代无邪志（武蔵）国造であった。武蔵竹芝は武蔵国造家の子孫であったことが確認される。一方、『古事記』上巻に「天菩比命の子、建比良鳥命、（これは、出雲国造・无邪志国造（略）等が祖ぞ）とあるように、武蔵（无邪志）国造の祖は天菩比命（『日本書紀』では天穂日命）である。天穂日命は素戔嗚尊と天照大神が「誓約」をした際、天照大神が身につけた玉から生まれた五柱の男神の一人で、天照大神によって自分の子と認知されている。そして、『日本書紀』神代上巻に「天穂日命。是出雲臣・土師連等が祖なり」とあって、ここでも土師氏の祖と伝えられている。先述のように土師宿禰古人が天応元年（七八二）に改姓を願ひ出、菅原の姓を得たのであった。菅原氏の祖先神は天穂日命であり、このことによって菅原氏は遙かに武蔵国造家と縁が結ばれている。一方また、相撲の節会起源伝承の主人公である野見宿禰の祖も天穂日命であった。天穂日命を扇の要として、伝承が結びついているのである。

その天穂日命について、『更級日記』には全く言及がない。日記に見え  
る神々としては、

- ①上京の途次富士川で耳にした、富士山に「そこばくの神々」が集まって県召の相談をする、という伝承
- ②六角堂の遣水の夢で、人が「天照御神を念じませ」と言ったこと
- ③常陸国に赴任した父からの手紙に「神拝といふわざして国のうちありきし」とあったこと
- ④常々「天照御神を念じ申せ」と言う人に、どこにいる神仏かと問うと、「神におはします。伊勢におはします。紀伊の国に、紀の国造と申すはこの御神なり。さては内侍所にすくう神となむおはします」と話されたこと
- ⑤再度の出仕の際、祐子内親王に供奉して宮中に参上し、「わが念じ申す天照御神は内裏にぞおはしますなるかし、かかるをりに参りて拝みたてまつらむ」と思って、「知るたより」である「博士の命婦」を頼った。「博士の命婦」は、「あさましく老い神さびて」、「人ともおぼえず、神のあらはれたまへるか」と思える老女であったこと
- ⑥大嘗祭の御禊をよそに長谷寺詣でをする途上で「石上もまことに古りにけること」と感じ、参籠中の夢に「すは、稲荷より賜はるしるしの杉よ」告げられたこと
- ⑦夫の死に茫然となり、不幸な生涯を思って、「稲荷より賜ふしるしの杉よ」、「天照御神を念じたてまつれ」と告げられた夢のことを悔いたこと

が挙げられる。このうち、「天照御神」は四回にわたって名前が記されて

いる。いずれもその神を「念じ」る、という、作者が信仰の対象とすべきであったことが強調されている。その神に対する信仰の不徹底が晩年の不幸をもたらしたのだという後悔となっている、と書くのである。

天照大神は天穗日命の母親であった。「わが念じ申す天照御神」とあるが、日々の信心の有り様は日記からは確認できない。しかし、⑤の「博士の命婦」は、作者の縁戚か単なる知人かは分からないが「知るたより」と記す。「博士の命婦」は「内侍所に所属する上席の女史で、神鏡護持を主たる任務とした」とされるが、その「あさましく老い神さび」た姿に接して、作者は「神のあらはれたまへるか」と感動を記している。作者は、④では天照大神についてある人に質問しており、そのようにして、この命婦から天照大神についてのより深い情報を聞き知ったことは十分考えられる。その際、天照大神の子、天穗日命の名も挙げられたことがあったのではないだろうか。

#### 四

相撲の節会の起源は菅原氏の祖である野見宿禰にあった。『更級日記』には、もちろん相撲のことは全く触れられていない。宮廷行事であり、女性たちには縁遠い内容であったからであろう。『源氏物語』では「相撲」の語が竹河巻、椎本巻に各一例あるのみであり、『枕草子』でも「むとくなるもの」(能因本)の段に「相撲の、負けて入るうしろ」(相撲人が負けて引っこむ後ろ姿)、「ことばなめげなるもの」(三巻本)の段に「相撲」と挙げられているなどの例が見えるが、多くはない。犢鼻褌を身につけてはいらるものほとんど裸の格闘技であり、地方から上洛した相撲人は訛があったり、言葉が乱暴であったり、女性たちの興味の対象とはならなかった、

ということかもしれない。

言うまでもなく相撲は格闘技である。『今昔物語集』(注十五)巻二十三の第二十一話から二十五話までは相撲人の話となっている。二十一話は陸奥国の真髪成村、二十二話は丹後国の海恒世、二十三話は駿河国の私市宗平、二十四話は甲斐国の大井光遠が主人公で、二十五話は真髪成村と海恒世の勝負の話となっている。いずれも相撲の名手として聞こえた実在の人物で、成村と恒世は平安中期の、宗平と光遠は一条天皇朝の人である。説話の主人公としてその異能ぶりが遺憾なく発揮されるわけで、例えば二十二話「相撲人海恒世蛇に会ひて力を試みる語」では、淵に棲む大蛇に足を巻き付けられ川に引きずり込まれそうになった恒世だったが、蛇の胴体を引きちぎって退治したところ、胴体の切り口は一尺程であったという。駆けつけた人々が蛇の力を確かめようと大縄を恒世に巻き付け、大勢で引っ張ったが、六十人程の力に相当したので、「恒世ガ力ハ百人許ガ力ヲ持タリケル」ということになったという、強力譚である。また、二十三話「相撲人私市宗平鰐を投げ上ぐる語」では、駿河の海辺で狩りをしている時に現れた鰐鮫に食いつかれそうになった宗平であったが、鮫の習性を巧みに利用して頭をつかんで陸上に三丈程も投げ上げ、退治した、という。宗平の冷静沈着な判断力と怪力が称えられている。他の相撲人も、皆、尋常ならざる怪力と、勝負師としての冷泉沈着な判断力や知恵を持ち合わせているのである。『更級日記』の竹芝伝承では、宮中の衛士に任じられた竹芝の男は、酒壺の風景を見せよという「みかどの御むすめ」の命に従って、皇女を背負い、「ろんなく人追ひて来らむ」と判断して追っ手を防ぐために途中の瀬田橋の橋板を一間ばかり取り外し、七日七夜で武蔵国に行き着いたのであった。延喜式の規定では、京から武蔵国までの下向は十五日と定められて

いたから、その半分の時間ということになる。この男の並外れた体力と、橋板を外しておくという冷静な判断力は、『今昔物語集』などに描かれた相撲人を思わせる。一般に相撲人は地方から召し出された強力な者とされるが、

九世紀ごろまでの相撲節相撲人は、衛府に任用されている者と、その年新たに相撲人として諸国から貢進されてきた白丁はくていとからなり、相撲人最高位たる最手まてを務めた者のなかからは近衛番長に任用される場合もしばしばあった。

このように、衛士・健児として徴発され衛府に付属させられた齊力人(注十六)による相撲奉仕が原型となって、相撲節相撲人が構成されたものと考えられている。

という指摘もあるように、衛士が相撲の節会の相撲人になった場合があったのである。衛士として都に連れて来られた竹芝の男の事情は知るすべもないが、その尋常ならざる力と判断力に、竹芝の男に相撲人の面影を見ることができるとはでないか。竹芝伝承は、地元竹芝の人によって語られた伝承ではあるが、後年、その伝承を日記に書き記す作者の脳裏では、竹芝の男に相撲人の姿が重ね合わされていたように感じられる。皇女が武蔵国の酒壺の風景に心引かれることとなった発端は、男の口ずさんだ言葉であった。それは、酒壺に浮かんだ「ひたえの瓢ひたえ」、すなわち、夕顔の実である瓢で作った柄杓が、風に吹かれて揺れ動く様であった。相撲の節会では、右方の相撲人は瓢ひたえすなわち夕顔の花を挿頭としていたことを考え合わせれば、竹芝伝承には相撲の節会が何かしら関わっているように思われる。

竹芝伝承は、男が女を伴って東国に下る話であるが、似たような設定の説話に『伊勢物語』二六段(芥河)・十二段(盗人)、『大和物語』百五十四段(ゆふつけ鳥)・百五十五段(山の井の水)などの、いわゆる略奪婚の話がある。「芥

河」では男は女を「盗みて」負って芥川の辺を逃げるのであり、「盗人」では人の娘を「盗みて」武蔵野に逃げて行く。「ゆふつけ鳥」では男が人の娘を「盗みて」龍田山に逃げて行き、「山の井の水」では大納言の娘を内舎人である男が奪って陸奥国に逃げて行くのであった。これらに共通するのは、女に恋慕した男が、親の許から女を奪って逃げる、ということである。略奪の主体は男であって、男の一方的な懸想の結果として略奪がなされ、その果ては女の死(芥河、ゆふつけ鳥、山の井の水)、女の奪還(盗人)という悲劇的な結果に終わってしまうのであった。一方、『更級日記』の竹芝伝承では、男の故郷の風景に心引かれた皇女が男に命じて武蔵国まで連れて来させるのであり、帝の許しを得た二人は結ばれて武蔵国に定着し、その子は武蔵という姓を賜った、というのであるから、主導権は女の方にあり、結末はハッピーエンドである。竹芝伝承の二人の関係は『伊勢物語』や『大和物語』の話とは全く位相を異にしているのである。とはいえ、男と女が他郷に逃げるという点では共通性は認められるのであるが、男の行動力についてはこれも大きな隔たりが感じられる。『伊勢物語』や『大和物語』の男は奪った女を背に負ったり、馬に乗ったりして逃げるが、竹芝の男は女を背負ったまま超人的なスピードと知略で東路を飛ぶように駆け下って行く。この東の男には、相撲人を思わせるたくましさを感じられるのである。『更級日記』の竹芝伝承における男と女の有り様の特異性については、次のような指摘もある。

ほかとは違う幸せな結末には、東国・〈関東〉への畏怖と憧憬がその素地にあり、王権の膝元ではない遠い異境の地ゆえにその反王権的行為が容認されていることは確かである。東国の独自性、自立性のなせるものといわねばなら

ない。作者は、文学少女で、とくに『源氏物語』の夕顔や浮舟に憧れている。この二人も略奪の末にそれぞれ悲劇的結末がある。孝標の娘が「武蔵竹芝伝説」に惹かれたゆえんである。<sup>(注十七)</sup>

ところで、夕顔の花と東国の関わりに関して、夕顔観音の伝承が伝わる。平将門の叔父平良文にまつわる伝承であるが、良文は相模国高座郡村岡郷（武蔵国大里郡村岡郷とも）を本拠としたので村岡五郎と称され、千葉、秩父、三浦、大庭等の坂東八平氏の祖と系譜付けられており、武蔵野開発の父と称されている人物である。『今昔物語集』巻二十五の第三「源充と平良文と合戦する語」にも語られている、代表的な武士である。長元元年（一一〇二）は菅原孝標が常陸介として任国に下る四年前に当たるが、六月に、下総国において前上総介平忠常が反乱を起こした。平忠常の乱である。この乱により、房総一帯は三年余りにわたって戦乱の地となって荒廃し、房総、常陸は疲弊の極に陥った。こうした状況の中で、菅原孝標は十二年間の散位を経て、長元五年に常陸介に任じられたのであった。平忠常の乱が一応の終息を見たという段階である。六十歳という高齢の孝標が常陸介に任命されたことの一因に、上総介として東国に下った経歴を持つことで関東の情勢に詳しいと評価されたことがあったと考えられている。平忠常は良文の孫に当たるから、良文の存在が常陸介孝標の情報圏に入ったことは十分考えられよう。その良文は晩年に下総国海上郡大友郷に移り住み、天曆六年（九五二）に下総国阿玉郡で没したとされる。良文については『千葉大系図』<sup>(注十八)</sup>に次のような記載がある。

— 良文 鎮守府將軍。陸奥守。初、村岡與五郎。上総 下総 常陸介

仁和二年丙午三月十八日誕生。(略)醍醐天皇延長元年癸未正月、依勅下向

東州、討逆賊、頭龍驤鷹揚之譽。同九年辛卯、與同族有相戰。此時有妙見擁護。故裔孫世々尊崇、以為鎮守神也。天慶二年己亥、任陸奥守、補鎮守府將軍。同三年庚子五月、賜將門之舊領、任下総上総常陸介、子孫繁榮于東州。所謂千葉・上総・三浦・土肥・畠山・大庭・梶原・長尾等八平氏也。天曆六年壬子十二月十八日卒。年六十七。言于忠頼、子孫應割見夕顔。即吾正體也。言畢上天。故不知其歿處。彼夕顔變現觀音小像。後裔崇號夕顔觀音大士。裔孫斷食夕顔矣。

良文は死に際して子の忠頼に、夕顔の実を割ってみれば吾が正体が現れる、と遺言したが、死後、夕顔の実が観音の小像に変じたことからそれを夕顔観音と称して尊崇し、良文も夕顔観音大士として崇拜されたのである。この伝記は史実としては確認できない部分もあるが、旧千葉県香取郡小見川町の樹林寺には夕顔観音と称される秘仏の千手観音が伝わっており、「大治元年（一一二六）に千葉常重が祖平良文の守護仏千手観音を安置、稲荷山寿林寺と称し真言宗寺院として創建した」と<sup>(注十九)</sup>されている。ちなみに、晩年の良文の居住地阿玉に当たる旧小見川町貝塚には良文具塚という貝塚があり、また周辺では夕顔の実から作られる干瓢は食さないということで、系図記載の伝承が生きているのである。

夕顔観音についての情報が菅原孝標の耳に入ったか否かは、確認のすべがない。けれども、良文の東国における重要性、その孫に当たる忠常の存在を考えてみれば、孝標に何らかの情報が入り、更には孝標女にも伝わったことはあり得るのではないだろうか。孝標女と夕顔の結びつきに関する一つの可能性である。



## 五

『延喜式』式内社の武蔵国入間郡五社のうち、筆頭に挙げられるのが出雲伊波比神社であった。現在、その比定社とされているのが埼玉県入間市宮寺鎮座の出雲祝神社である。出雲系の神である天穂日命と、初代武蔵国造とされる兄多毛比命を主祭神とする。この社に関して、次のような伝承が報告されている。

菅原道真の三男（道武）が、旅の途中で先祖アメノホヒを祭る当社に二人の子（道英、道利）を連れて参拝し、道真公の像を収めたという。天応元（七八二）年、道真の曾祖父、土師宿弥古人らが菅原に改姓。その土師氏の先祖がアメノホヒ（十四世の孫が野見宿禰＝出雲国人）だと続日本紀は記す。道真の子にも、先祖は出雲人だという記憶が伝わっていたことを思わせる逸話だ。<sup>（注二七）</sup>

道真の三男道武、孫の道英、道利は系図上判明ではないので、伝承ではあるが、菅原氏の人々の間に、菅家や祖神天穂日命に対する認識と尊崇の意識を読みとることができる逸話ではあるだろう。

孝標女は日記に「紀伊の国に、紀の国造と申す」者が祀る神のことを聞き及んだことを記している。竹芝伝承の紹介においては武蔵国造に関しては記されないが、帝の宣旨にある「武蔵の国を預けとらせて」は武蔵国造を意味しているとすれば、国造という言葉に違和感は無かったであろう。武蔵国造の祖神は、作者の属する菅原氏同様、天穂日命であった。武蔵国造という言葉に親近感のような感情を抱いたとしても不思議ではない。長々と紹介した竹芝伝承を「と語る」と記すのみで締め括り、自身の感想を全く記さずに感動を呑み込んでいるかの如くである。後年、武蔵竹芝の

男が菅原氏と遠い縁に当たると知ったとすれば、大変な感動を覚えたであろう。「と語る」の言葉には、作者の、菅原氏の父祖に対する万感の思いが埋め込まれているように感じられる。

一方、相撲の節会の起源は菅原氏と無縁ではなかった。ここでは、夕顔の花が大きな役割を担っていた。また、夕顔の実である瓠は日記中の竹芝伝承で重要な風景を形作っていた。夕顔の花や実は作者には親しみの感じられる存在であったと言えるだろう。その花の名を呼称とする『源氏物語』の夕顔という女性について、浮舟と同じく東国の記憶を宿した身近な存在と認識したのではなかったか。孝標女が『源氏物語』の夕顔に心惹かれたのは、以上のように夕顔という花の存在が親近感を持って感じられたことが一因であったと考えたい。

## 注

- 一、『更級日記』の本文は、以下、新編日本古典文学全集『和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』（小学館、一九九四）による。
- 二、注一の犬養廉『更級日記』解説による。
- 三、『相撲大事典 第四版』（現代書館、二〇一五）
- 四、新編日本古典文学全集『うつほ物語2』（小学館、二〇〇二）
- 五、『古事類苑 武技部』（吉川弘文館、一九九九）
- 六、『源氏物語』本文の引用は、以下、新編日本古典文学全集『源氏物語1』6（小学館、一九九四～一九九八）による。
- 七、『枕草子』本文の引用は、以下、断りのない限り、新編日本古典文学全集『枕草子』（小学館、一九九七）による。
- 八、湯浅浩史『ヒョウタン文化誌―人類とともに一万年』（岩波書店、二〇一五）

- 九、新編日本古典文学全集『日本書紀1』（小学館、一九九四）
- 十、新日本古典文学大系『続日本紀5』（岩波書店、一九九八）
- 十一、注九の頭注
- 十二、新編日本古典文学全集『将門記 陸奥話記 保元物語 平治物語』（小学館、二〇〇二）頭注
- 十三、新編日本古典文学全集『古事記』（小学館、一九九七）
- 一四、注一の頭注
- 十五、新編日本古典文学全集『今昔物語集3』（小学館、二〇〇二）
- 十六、新田一郎『相撲の歴史』（講談社、二〇一〇）
- 十七、荒井秀規『古代の東国3 覚醒する〈関東〉 平安時代』（吉川弘文館、二〇一七）
- 十八、房総叢書刊行会編『紀元二千六百年記念 房総叢書第九巻 系譜及石高帳』（房総叢書刊行会、一九四二）より抜粋し、適宜、新字に改めた。（千葉県立図書館 菜の花ライブラリー  
[http://e-library.gprime.jp/lib/\\_pref\\_chiba/da/detail?tlcod=000000014-CHB600266](http://e-library.gprime.jp/lib/_pref_chiba/da/detail?tlcod=000000014-CHB600266)  
 （二〇一七年一月一三日閲覧）
- 十九、日本歴史地名大系『千葉県地名』（平凡社、一九九六）
- 二十、岡本雅享『出雲を原郷とする人たち』（藤原書店、二〇一六）

（もとよし すすむ ビジネスデザイン学科）